

Verbal Tough Constructions and Their Structure

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 現影, 秀昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/510

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



動的tough構文とその統語構造

Verbal Tough Constructions and Their Structure

現 影 秀 昭

GEN'EY, Hideaki

1. 序

本論考では、Gen'ey (2000, 2002: 184) でも実例を挙げた次の様な「tough類動詞構文 (Verbal Tough Constructions: VTC)」について、記述に重点をおいて、その統語構造および(「Burzioの一般化」と深く係わる)特性について考究する。^{1) 2)}

(1) 'A big guy costs money. Things ain't scaled for him. He costs to feed, to put clothes on, and he can't sleep with his feet in the bed.

[Raymond Chandler, *Farewell, My Lovely*.]

普通は(2)の様な文がtough構文(以下TC)と呼ばれる。その述語として典型的現れるのは形容詞あるいは名詞である (N.B. Hicks (2009: 535, 537))。

(2) John is easy to please.

しかし、述語が動詞句や前置詞句であってもtough類述語とよく似た特性を示すことが知られている (Hicks (2009: 537, fn. 2, 558))。

(3) a. It takes over an hour to solve problems like this one.

b. Problems like this one take over an hour to solve. (Hicks (2009: 558))

c. This is for you/up to you to decide.

(Mair (1990: 60))

本論考では、第一に、(1)や(3b)の様なVTCの述語に現れる動詞+名詞句の結合が、(4)に挙げた「Burzioの一般化」と矛盾するという特徴があることを指摘しておく。

(4) 主語位置にθ役割を与える動詞はすべて、そしてそのような動詞に限り、目的語に格を与えることができる。

(Burzio (1986: 178))

takeやcostの様なtough類動詞は、主語に虚辞itをとることができることから分かるように、主語にθ役割を与えないにもかかわらず、(他動詞として) 目的語に格を付与し、不定詞補文を従えることができる点で「Burzioの一般化」に反する。(上記以外の) 例を挙げると、(5a)様なVTCにおいてJohnやan hourはtakeから(目的)格を付与されるはずであるが、takeは主語にθ役割を付与しないので「Burzioの一般化」との齟齬が生じる。

(5) a. The letter took John an hour to read.

(Huddleston (1971: 163))

b. cf. The letter took an hour for John to read. (ibid.)

後述するが、本論考では、「小さい_v」には種類が幾つかあって、VTCの主節のVPを補部にとる「小さい_v」は、その中でも「主語にθ役割を与えないが、(目的)格は付与する

キーワード: tough構文、空演算子、 $\bar{A}$ 移動、フェーズ

Key words: 'tough' construction, null operator, $\bar{A}$ movement

タイプのものである（[-θ, +Case] という素性を持つ）」ことを提案する（cf. Chomsky (1995)、Collins (1997)、長谷川信子 (2009)）。またBurzio (1986) の一般化を改訂するかどうかという問題については本論考では立ち入らない（この問題についてはUra (2003) を参照のこと）。

(V)TCの構造は、埋め込まれた不定詞節に一見目的語が「欠けて」いて、その「欠けた」目的語が主節の主語と義務的に同一指示の解釈を与えられるという特徴がある。VTCは(6b)の様な補文目的語削除（COD）に現れるpretty述語とはθ役割の点から異なる振る舞いを見せる。

- (6) a. It amuses Mary to read this book.
(Jones (1991: 152))

a'. It is up to you to decide this.

- b. *It is pretty to look at Mary.
(Lasnik and Fiengo (1974: 535))

- (7) a. To read the book requires specialized knowledge.
b. *To look at Mary is pretty.

伝統的には、(V)TCの主語は埋め込まれた不定詞節の動詞によってθ役割を与えられ、(動詞類) tough述語は「外項」θ役割を与えないとされる（N.B. Hicks (2009: 536)）。この直観に従って、VTCも（普通のTCについての初期の有力な分析であるRosenbaum (1964)流に）目的語から主語への繰上げ規則（基本的にはA移動の操作）として捉えることが可能である。しかし、Chomsky (1977)に従うと、VTCは音形のないwh演算子のĀ移動に基づく分析を与えられることになる。

- (8) the cake_i took you all day [_{CP} Op_i [_{TP} PRO to help John bake t_i]].

(cf. Chomsky (1981: 318, n.32))

Ā移動の証拠は島の制約や寄生空所を認可することなどであるが、VTCの主語（the cake）を元位置に基底生成するアプローチでは、VTC主語にθ役割が与えられず、典型的なθ役割付与の理論の違反になる。前述の様に、VTCの主語位置は、θ役割を与えられない（虚辞itが生じる）位置だからである。最近の原理変数のアプローチからするとVTCはA移動とĀ移動の両方が係わることになるが、格理論、局所制約、θ役割付与の面から問題が生じる。以下本論考ではVTCの諸特徴を概観した後、Hicks (2009)に基づく分析の可能性を探ることにする。

2. tough類動詞とその項

VTCで用いられる述語は典型的には動詞（take, cost, require, amuse, need）である。Mair (1990: 60-61)によれば、VTCに現れうる主節の動詞はtakeとその同義語であるcost, require, needや前置詞付き動詞be for, be up toに限られるというが、Jones (1991)はamuseの例も挙げている。またMair (1990)によれば、VTCには「感情・判断」を表わす動詞が現れることができないという。

- (10) a. The music is pleasant to listen to.
b. It is pleasant to listen to this music.
c. *This sudden change in your behavior pleases me to see.
d. cf. It pleases me to see this sudden change in your behavior.

(Mair (1990: 61))

tough類動詞の下位分類もさらに議論の余地があるが、本論考では、tough類動詞の特定の意味的特徴については立ち入らないことにする。

ただし(3b)の様なVTCは、生成文法の標榜

する「統語論の自立性」に対して強い反証になる可能性があるという梶田 (1976: 275) の指摘は未だに重要である。(3b)において動詞句は、easy, difficultの様な形容詞と同じ意味要素を含んでいるのでtough移動が可能になるのであるが、この動詞句内の各語彙項目の内在の意味だけでなく、tough構文の文法関係で結合されたとき初めて生じる、総合の意味にも言及しなくてはtough移動という変形の適用条件は記述できないからであると梶田 (1976: 275-276) は主張している。

2.1. 不定詞節の省略

もしVTCの主語が、不定詞の動詞がその θ 役割を与えることに依存しているとしたら、この動詞は常に構造上存在していなくてはならない。しかし、不定詞節が省略される事例にしばしば遭遇する (cf. Hicks (2009: 537))。

(11) a. Plants need sunlight and water.

b. Plants need sunlight and water to grow.

(Scholastic, quoted in Konishi (2000: 993))

(12) a. The book amuses Mary.

b. The book amuses Mary to read.

(Jones (1991: 155))

埋め込まれた節に (VTCの主語に主語の θ 役割を与えることのできる) 述語が何も無い場合は、tough類動詞が θ 役割を与えなくてはならない。この様なアプローチを取ると、VTCの不定詞節が現れるときにはいつでも、その不定詞節が付加詞でなくてはならない。なぜなら、その不定詞節は非文法性を生じることなく自由に削除できるからである。しかし、VTCの不定詞節はいつでも省略できるわけではない。不定詞節に音形が与えられない例は、省略された節の意味を復元できる様に ((13)や(14)の様に) 言語文脈ないし言語外文脈が十分豊かでなくてはならない。

(13) Critics say missiles defense system would take years to develop and cost billions of dollars (to develop). (USA Today)

(14) The number of potential buyers has dropped to one or two per property, from five or six before 2009, and homes that once sold within 90 days now takes about 120, Mr. Dun said. [International Herald Tribune, Sept. 30, 2011, p. 16]

省略された不定詞節の意味が先行談話から復元できない場合は、VTCの容認可能性はVTCの主語によって示されたモノの顕著な特徴に依存することになる。従って、(10a)は(10b)に、(11a)は(11b)に自由に書き換えることができる。なぜなら、植物は典型的には(光合成を行うので) 太陽光と水が必要であるし、本は典型的には人が読むものであるからである。しかし大男は(必然的にあるいは自動的に) 飯を食わせたり、服を着せてやつたりするものではないので、(15a)と(15b)を自由に書き換えることできないのである。

(15) a. A big guy costs (money).

b. A big guy costs to feed, to put clothes on, and he can't sleep with his feet in the bed.

従って、不定詞節が省略可能かそうでないかは、付加詞というよりむしろ項の省略を暗示する、文脈上の復元可能性に依存するように思われる。

統語的な項が表に現れない場合、その意味は文に暗黙のうちに含まれているとDowty (1982) は指摘する。VTCの場合は、tough類動詞の持つ難易度は、「動作主の経験」に義務的に関係し、その経験は表に現れるか否かは別にして、不定詞節の内容に対応するものと仮定する (N.B. Akatuka (1979: 6))。

1.2. VTCと非TCとの意味的な違い

VTCの主語は、難易度の原因となる (cf. Bayer (1990))。 (16a) においては、一番顕著な（「責任」あるいは「原因」）の読みは、（構造上の複雑さや立地条件等の）建物の何らかの特性に、その（建築の修復の）困難さが帰属させられるが、(16b) ではそのようなことは無い。

(16)a. The building will cost more than a million to repair.

b. It will cost more than a million to repair the building.

pretty構文のような非TCにおいては、 θ 役割は不定詞節に与えられる。VTCの統語形では、しかしながら、原因の θ 役割は不定詞節にではなく、VTCの主語に与えられる。不定詞節はVTCにおいては付加詞ということになる (cf. Kim (1995))。

しかし、VTCの責任の所在・原因の読みは制限されていて弱く、文脈上の情報が追加されると簡単に取り消される (N.B. Goh (2000b))。例えば、(17) では、困難さの理由は建物それ自体ではなく、（時代遅れの）不適切な建設機械にある。

(17) The building will cost more than a million to repair while using outdated construction machinery.

さらに多くの文脈ではVTCは使役の解釈を生むことができない。例えば、(15a) の様にVTC主語が命題である場合、対応する(15b) の様な非(V)TCと解釈上の区別がつかない。

(18)a. That they were probably talking about him at that very moment amused him to think.

b. It amused him to think that they were probably talking about him at that very

moment.

同様に、(19) のthe hatchetの様なイデオム・チャンクは、その性質からして責任を負うことができないが、VTCの主語として現れる (cf. Goh (2000a))。

(19) The hatchet takes a long time to bury after long years of war.

しかし、次のような例ではイデオム・チャンクはVTCの主語になりえない。

(20) a. *The bucket requires strength to kick.

b. *Tabs require expertise to keep on the Russian Embassy.

VTCと非(V)TCの解釈上の違いは主題役割の違いというよりは語用論上の違いに帰した方がよさそうである (Goh (2000a, b))。VTCは主語に「焦点や強調」を与えるが、非(V)TCは与えないという傾向にあるとも言える (N.B. Soams and Perlmutter (1979: 501))。

不定詞節が随意的であるということからわかることは、実は不定詞節の省略が付加詞の省略というよりは項の省略により近いということである (Hicks (2009: 539))。非(V)TCでは不定詞節は紛れもなく項であるので、VTCにおいても項であっていけないということはない。

また、以下、本論考ではChomsky (1981) その他に従って、tough類動詞の動詞結合はVTC主語に θ 役割を与えないと仮定する。Pesetsky (1987) に従って、不定詞節の省略されたVTCは、統語的には存在する項としての節が音韻的に削除されただけであり、不定詞節の本動詞はVTCの主語に θ 役割を与えることができると仮定する。

このセクションを終了する前に、tough類動詞は「目的語」の随意的な経験者項に θ 役割を与えることを指摘しておく。

- (21) a. The game took her less than an hour to finish ...
 (COBUILD Advanced Learner's English Dictionary New Digital Edition)
 b. A two-day stay there cost me \$ 125.
 (COBUILD)

3. 理論的な文脈

理論的な観点から見ると、VTCを「埋め込まれた不定詞節のvP内の構造でVTC主語がそのθ役割を受け取って、主節の主語位置に繰り上がる」というミニマリスト・プログラムのアップデートした分析（単純にA移動に還元するという）は以下の理由でうまくいかない。第一に、VTCの主語が埋め込み節の目的語の位置から移動してきたとすると、対格付与を免れなくてはならない。VTC主語は派生の後の段階で主格を付与されるからである（*Him is easy to please. vs. He is easy to please.）。第二に、VTCは主語位置（不定詞節の主語、PRO）を越えて移動することができるという点で、A移動としては例外的である（cf. *The prize_i is tried [PRO to be won t_i]. の様なA移動（受動化）はふつう許されない）。従って、VTCをA移動で分析することはtough類動詞の主題役割特性とは整合性がある様に見えるものの（つまり、VTC主語は、補文動詞の目的語の位置で主題役を与えられていても、主題役割が与えられないとされる虚辞itが現れる主節の主語位置に繰り上がることができるが）、原理変数モデルの核となる2つの前提（格理論とA移動に対する局所性の制約）とは合わないことになる（cf. Hicks (2009: 541)）。

この2つの問題はtough類形容詞のTCでも生じるが、それをChomsky (1977: 102-104)

は「空演算子」を仮定する分析で克服した。easy-to-please構文がwh移動の特性をもっていることはLasnik and Fiengo (1974) でも観察されている（Chomsky (1977: 104)）。

- (22) John_i is easy [_{CP} Op_i [_{TP} PRO to please t_i]].
 (Hicks (2009: 541))

この分析はVTCにも容易に転用することができる。

- (23) the cake_i took you all day [_{CP} Op_i [_{TP} PRO to help John bake t_i]].

(cf. Chomsky (1981: 318, n.32))

VTCの主語は動かずに元から主語位置に基底生成されて主格を受け取る。埋め込み節内の動詞の目的語は空のwh-演算子（おそらくは対格を受け取る）である。明示的なwh句と同様に、空演算子はSpec, CPの位置に循環的に移動しなくてはならない。しかし、A移動とは異なり、 $\bar{A}$ 移動は典型的には主語を越えて移動することができる。wh移動があるという証拠は以下の様に堅固である。第一に、VTC不定詞からの要素の取り出しは、明示的なwh移動の場合に典型的に観察される局所性の条件が課される。

- (24) a. the nuclear missile takes approximately five minutes to shoot on this submarine.
 b. *which missile does this submarine to take (approximately) five minutes to shoot on?
 c. *[CP which missile_i does [_{TP} this submarine_j [_{vP} take five minutes [_{CP} Op_j [_{TP} PRO to shoot t_i on t_j]]]]]

(based on Chomsky (1977: 105))

(24b)のVTCの非文法性が生じるのは、埋め込まれた不定詞節のSpec, CP位置が移動してきた空演算子(Op)によって占められているので、明示的なwh句（which missile）が

主節のSpec, CPへ行く途中のターゲットにならないからである。第二の証拠は、(25a)が示すように、(25b)のwhyのような、途中のSpec, CP位置を介在するカテゴリーが占めていなければ、VTCは複数の節をまたいで長距離の依存関係を許すという事実が挙げられる。

(25)a. A large telescope like Hale requires a lot more energy [to imagine [any scientist believing [he could build]]].

b. ??A large telescope like Hale requires a lot more energy [to imagine [any scientist wondering [why he would agree to build]]].

最後に、VTCは寄生空所を認可する。VTCに何らかの種類のwh移動が絡んでいるとしてはじめて、VTCと繰上げ構文の寄生空所の文法性の非対称性が説明できる。

(26)a. (?) Lioyd Webber musicals_i require no thinking [Op_i to condemn t_i [without even watching e_j]].

(cf. Hicks (2009: 542))

b. *Lioyd Webber musicals_i are likely [Op_i to be condemned t_i [without anyone even watching (Hicks (2009: 542))

Chomsky (1977)に基づくアプローチは、(標準的な) θ理論に違反しているので、新しい理論上の問題を作り出すことになる。VTC主語がtough類動詞からθ役割を受け取らないという分析のもとでは、1つのθ役割がどのようにして2つの項（つまり、不定詞内の空演算子とVTC主語）の間で共有されるのかが不明であるという問題である。

Chomsky (1981)が形容詞のtough構文のθ役割の問題に対して提案した、巧妙な解決策がtough類動詞構文に応用できるか考えてみよう。すなわち1つのθ役割が、空演算子か

らVTC主語の転送されるというものである。これはNanni (1978)にヒントを得て、(例えば That cut takes a long time to heal.の) 派生の take a long time toの部分は、内部構造のない複合動詞であると仮定するアプローチである。Chomsky (1981)の精神にのっとって、take a long time toの部分を再分析（「平板化」）して、その結果A痕跡がA痕跡の位置づけを与えられるようにするものである。これはGBの枠組みではVTC主語へのθ役割の転送が可能になる統語形である。ミニマリスト・プログラムでは痕跡に基づく移動へのアプローチは大部分破棄されているので、このアプローチがミニマリストの前提の下で、どの様にアップデートできるのか不明である。またこのアプローチに対する経験的な反論もある。語彙項目と目されるtake a long time toを構成する要素が隣接していない環境においては、take a long time toは単一の語彙項目として再分析することはできない(N.B. Levine (1984a,b))。また語彙項目の中へあるいはそこから外への移動は禁止されていると仮定すると、take a long time はwh移動や右節点上昇変形が適用される派生の段階では内部構造を持たない形容詞であるとは単純にはいえないはずである。

(27)a. How long does that cut take to heal?

b. That film takes much more time than this one to shoot.

いずれにしても、Chomsky (1981)の分析は、VTCに対するA移動とA̅移動の複合分析への道を開いたことは確かである。本論考では、以下、Hicks (2009)に従って、VTCをこの路線で具体的に分析することを試みる。

4. ミニマリストの仮定

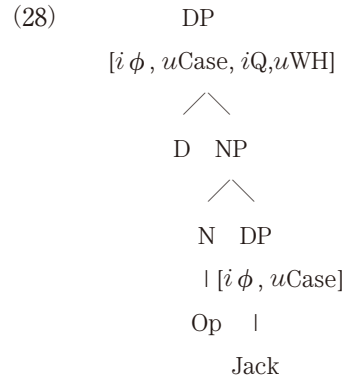
Hicks (2009)のtough構文の分析は、Chomsky

(2000, 2001, 2004)のフェーズごとの派生の枠組みで行われ、Hicks(2009)は、その分析がVTCにも適用できることを示唆している(ただし具体的な派生は示していない)。まず、フェーズ理論の枠組みについて概観しておく。なお、以下の記述はHicks(2009: 545-546)に依拠している。文法には(概念系との)インターフェースで解釈不可能である統語素性を派生から取り除くために一致の操作がある。値を持たない素性は(これをuを接頭辞付加して表わすことにするー例えば[u ϕ])はインターフェースでは解釈不能であるので、それを含む派生の部分が意味解釈部門に転送される前に、派生から削除されなくてはならない。解釈不可能素性は探索子として機能し、局所的なc統御領域内にあるマッチする値を持つ解釈可能素性(目標: つまり[i ϕ])を探す。素性が符合すると、これらの素性をもつ2つの範疇の間の一致が適用されたことになり、解釈不可能素性の値が決まる。インターフェースによる解釈は漸増的に行われる。すなわち「フェーズ」ごとに行われる。各フェーズ(標準的にはCPと他動詞vP)を終了すると、フェーズ内の統語的な構築物はインターフェースに送られ、その後のさらなる狭い統語論の操作に対して不活性化する。例外は各フェーズの末端にある統語的な構築物(すなわちフェーズ主要部C, vおよびその指定辞(Spec, CP, Spec, vP))である。フェーズの末端はすぐ上のフェーズにとってアクセス可能である(フェーズ不可侵条件, PIC)。どのフェーズでも完了すると、解釈不可能素性を持つ範疇はすべてその素性を照合する一致の操作を受けるか、あるいはフェーズの末端の位置を占めなくてはならない。フェーズの末端はすぐ上のフェーズ内の探索子がアクセス

可能だからである。

5. 複合的な空演算子 ([「密輸業者 (smuggler)」])

本論考では、Collins(2005)のsmugglingのapproachに沿ったHicks(2009: 54)に従い空演算子が複合的な内部構造を持つwh句であるという分析を受け入れる。D主要部はwh素性を持つが、DPの空の名詞補部は、単一の項を必要とする述語であると見なす。選択によって、空の名詞とDPの併合が動機付けられる(28)。



(Hicks (2009: 547), slightly modified)

DP内のDP((28)のJohn)が英語でその[uCase]を照合するためには、形態音韻論的にマークされた機能主要部(picture of Jackという時の)ofか、あるいは(Jack's pictureの様な)所有格の'sが必要である。複合的な空演算子の中には形態論上明示的な機能要素がないので、空演算子のDP内の項の[uCase]はDP内では照合することができない。

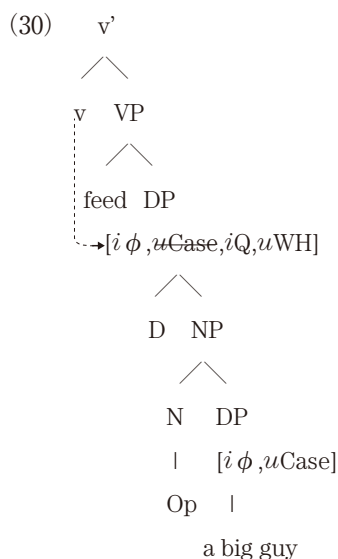
Hicks(2009: 547)は、この複合的な空演算子が(V)TCの先行研究に見られた問題を解決すると主張する。具体例として、VTCの派生を以下に示す。Hicks(2009: 558)はtakeのような動詞述語の構造にも複合的な空演算子の構造を仮定することを示唆しているが、具体

的な分析を示していない。本論考のこのセクションの目的は、形容詞述語に基づくtough構文と、takeなどのtough類動詞構文が本当に平行する分析が受けられるのかを検証することにある。次の単純な例を考えてみよう。

(29) A big guy costs money to feed.

[cf. R. Chandler, *Farewell, my Lovely*]

派生の始めに、((28)の線に沿って)複合空演算子を派生したら、それをfeedの目的語としてVと併合する。こうして派生したVPを小さいvと併合し、複合的な空演算子は、vと ϕ 素性の一致を行う。この場合vの[u ϕ]が当該の探索子となる。

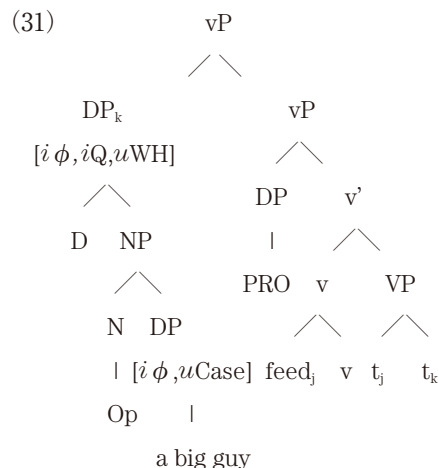


ϕ 素性の一致の反映として、複合的空演算子の[uCase]を格を与える主要部vが照合する。

しかし、複合空演算子の[uWH]が照合されないままである。この解釈不可能素性が生き残ると空演算子の持つ[iQ]が活性化したままになるという帰結を導く。a big guyの[uCase]が未照合のままであるということも重要である。というのはa big guyがまだ格付与主要部との ϕ 素性の一致を受けていないからである。[uCase]は（概念側の）インターフェースで

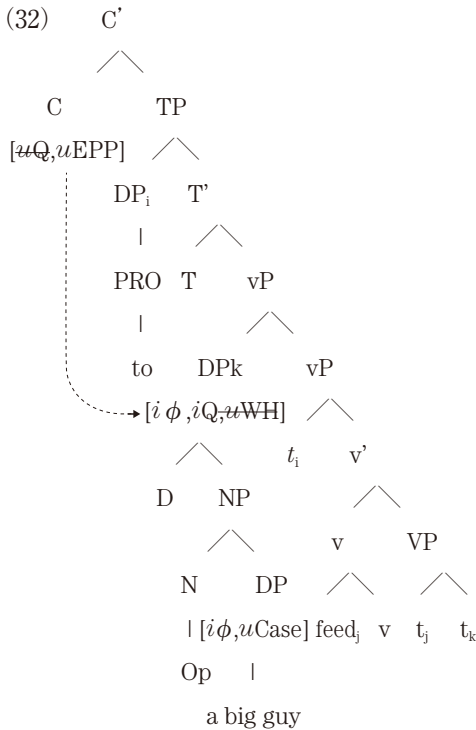
は非合法であり、従って今いるvPフェーズで照合されるか、フェーズの末端（Spec, vP）に到達して、概念側のインターフェースへの転送を免れるかしなくてはならない。

通常のVからvへの移動（V-to-v movement）の後、feedの外項、すなわちPRO、がSpec, vPで併合する。しかしながら、このフェーズはまだ完了していない。というのは[iQ, uWH]という素性の集合を持ったwh要素が、元位置では[uWH]を照合できないので、英語では典型的には移動しなくてはならないからである。PICの要請により、移動は各フェーズの末端を通して循環的に行われなくてはならず、vの随機的な[uEPP]素性のおかげで外側のSpec, vPの位置をターゲットにすることができる。重要なのは、a big guyを随伴する、複合演算子のこの移動が、またa big guyの持つ[uCase]が、残りのフェーズと接するインターフェースに転送されるのを免れさせるという帰結をもたらすことである。従って(31)が示す様に、空演算子は、その中に埋め込まれた、a big guyを、フェーズの末端まで「密かに持ち出す (smuggle)」する役目を果たす。



vPフェーズは空演算子が外側のSpec, vPに

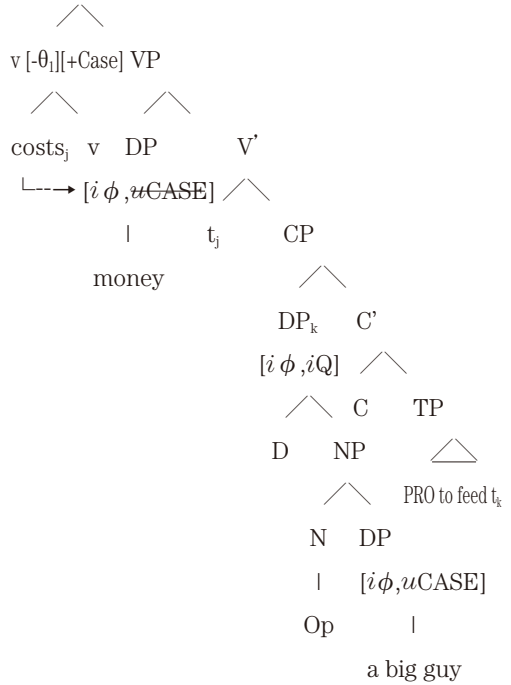
wh移動して終結する。vPに残った解釈不可能素性はすべて、要求どおり、フェーズの末端にある。というのは、PICによって、vPフェーズの領域(VP)はいまや、これ以上の操作を受けることができないからである。派生は(32)の様に進む。PROが不定詞節のSpec,TPに移動し、CがTPと併合する。このCは[uQ]であると仮定する。この[uQ]は、vPフェーズの左端にある複合空演算子の[iQ]と探索子-目標の一致の統語形で照合される。複合空演算子の[uWH]は、この操作の反映として照合され、空演算子の残りの解釈可能素性を不活性化する。



Cの[uEPP]は、次に、英語のwh移動の常として、複合空演算子のフェーズ末端位置Spec,CPへの移動を駆動する。演算子主要部の素性はすべて照合され(従ってその解釈可能素性は不活性化し)たが、CPの末端へ複合演算子が移動したので、CPのフェーズで、

a big guyの未照合の[uCase]は、概念側のインターフェースへの転送を免れることになる。さもないと、派生が破綻してしまう。CPのフェーズが完了したので、派生は、(33)の様に、主節へと向かう。

(33) vP



上のvPはtough類動詞costの投射で、格付与主要部vがmoneyの[uCASE]を照合し対格を付与する。さらにVPの主要部costがvに繰り上がる。本論考ではtough類動詞用の「小さいv」は、主語にθ役割は与えないが、目的語には格を与えるので、[-外項(External Argument: θ₁)], [+Case]という素性を持つと仮定する。従って、tough類動詞(の小さいv)は「Burzioの一般化: 主語位置にθ役割を与える動詞はすべて、そしてそのような動詞に限り、目的語に格を与えることができる。(Burzio(1986: 178))」に反することになる。この点でtough類動詞は、Ura(2003)で論じられている動詞behaveと統語的に同じ振る舞

いをするといえる。

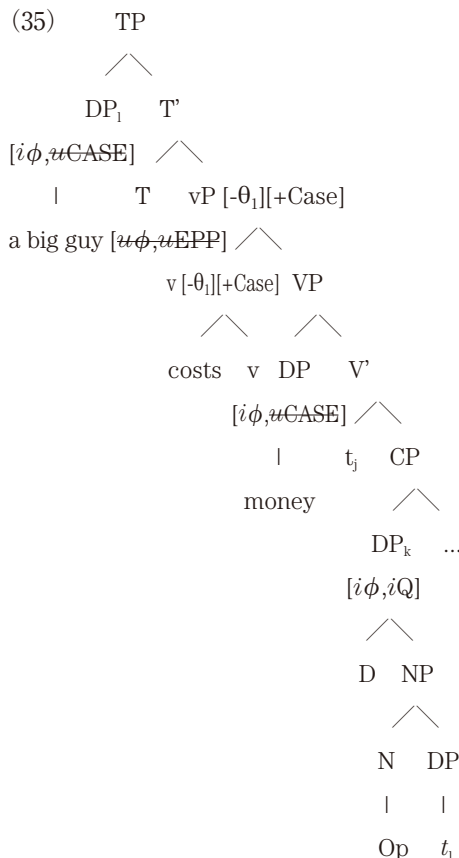
(34)a. It behooves public officials to do their
duty. (cf. Ura (2003: 86ff.))

b. Does it behoove you to hire a short
sale lawyer to help you pursue a short
sale ...? (active rain.com)

Ura(2003: 88)は「Burzioの一般化」を改訂
することを提案しているが、本論考ではこの
問題には立ち入らず、今後の研究課題とした
い。

Tは今や上のvPと併合し、このTは $[u\phi]$ を
持っており、 $[i\phi]$ を探索する。 ϕ 一致の反映
として主格が目標に与えられる。この目標は
 $[uEPP]$ を満たすためにSpec, TPへ移動する。
派生の中で活性化したままになっている唯一
の $[i\phi]$ は、複合演算子内のa big guyのもつ $[i\phi]$
である。Tとa big guyの間の一致は局所性
の条件を満たすと仮定し、a big guyの
 $[uCASE]$ と同様に、Tの $[u\phi]$ と $[uEPP]$ が照合
される。標準的な仮定に従って、フェーズの
投射はvPとCPであると仮定する。この2つ
はChomsky(2000, 2001)で「命題的」とされる
ものである。本論考では、 $v[-\theta_1][+Case]$ を主
要部とするvPは、aPが、受け身や非対格vPと
同様に指定辞を投射せず、フェーズとならな
いのも同様にフェーズとはならないと仮定す
る。その結果、CPが探索子のTに一番近い
フェーズ境界となり、PICにより、CPの末端
にあるDP a big guyが探索領域内にあること
になり、一致に対して十分近接していること
になる。従って、派生に残されたすべての解
釈不可能素性がTP投射で照合され、派生の
最終フェーズが、(35)の様に収束する。なお、
詳細は立ち入らないが、costsは既に屈折を
与えられた形で派生に導入され、機能範疇T
と探索子—目標の関係に入ることによって時制を照

合するものと仮定する。



6. 結論と残された問題

本論考では「目的語繰上げ／tough移動」
と同じ振る舞いを示すが、形容詞の代わりに
(tough類)動詞が用いられた「動(詞)的tough
構文 (Verbal Tough Construction: VTC)」の
特性を記述に重点をおいて論じた後、
Chomsky(2000, 2001, 2004)のミニマリスト・
プログラム (フェーズ理論) の枠組みで、そ
の構造と派生について考察した。

Hicks(2009)は複合的空演算子を仮定し、
それに埋め込まれたDPをフェーズの末端に
「密輸」することで、A移動とA'移動の両方の
特性を有するtough類形容詞の難易構文の分
析を行っている。本論考ではHicks(2009)の

複合演算子を仮定する分析がVTCにも適用できる可能性を具体的な派生を示すことによって検証した。Hicks(2009: 558)はtakeの様な述語動詞にも、複合演算子を仮定する構造と派生を与えることができるということを示唆するにとどめ、具体的な分析やVTCの特性については検討していないからである。

結論としては、VTCにも複合演算子を仮定した分析を確かに適用することは可能であるが、tough類動詞(用)の「小さい_v」は「主語にはθ役割を与えないにもかかわらず、目的語には格を付与することができる」という点で「Burzioの一般化」と矛盾するという問題が浮かび上がってきた。本論考ではtough類動詞用の_vが[- External Argument: θ_i]と[+Case] (すなわち[-外項],[+格])という素性を持つということを提案した。「Burzioの一般化」をUra(2003)で提案されているように改訂するか否かについては、残された問題として今後の研究に委ねることにしたい。

注

- 1) Kajita(1977: 68)は、動的文法理論に従えば、require+NPの様な動詞句にも「目的語繰上げ」(tough移動)が適用されることが予測でき、それが事実によって裏付けられることを先駆的に実証している。なおworth+V-ingタイプも広義のtough構文に含まれる。
- (i) An Iranian offer worth considering.
[*International Herald Tribune*, Fri., Sept. 30, 2011, p.6]
- 2) アスペクトに関して、tough類形容詞述語を用いた構文も、tough類動詞を用いた「動詞的tough構文」も統語上同じ振る舞いをする。
- (ii) John is being easy to please.
(Lasnik and Fiengo (1974: 543))
- (iii) That cut is taking a long time to heal.

参考文献

- Akatuka, Noriko (1979) "Why Tough Movement is Impossible with Possible," In *Papers from the Fifteenth Regional Meeting, Chicago Linguistic Society*, ed. by Paul R. Clyne, William F. Hanks, and Carol L. Hofbauer, 1-8, Chicago, University of Chicago, Chicago Linguistic Society.
- Bayer, Smuel (1990) "Tough Movement as Function Composition." In *The Proceedings of the Ninth West Coast Conference on Formal Linguistics*, ed. by Aron L. Halpern, 29-42, Stanford, CA, Stanford University, Stanford Linguistics Association.
- Burzio, Luigi (1986) *Italian Syntax*, Kluwer, Dordrecht.
- Chomsky, Noam (1977) "On Wh-Movement," In *Formal Syntax*, eds. Peter Culicover and A. AKmajian, 71-132, New York, Academic Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Dordrecht, Foris Publications.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, Cambridge, MA, The MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) "Minimalist Inquiries: The Framework," In *Step by Step: Essays on Minimalist Syntax in Honor of Howard Lasnik*, ed. by Rodger Martin, David Michaels, and Juan Uriagereka, 89-155, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," In *Ken Hale: A Life in Language*, ed. by Michael Kenstowicz, 1-52, Cambridge, MA: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," In *The Cartography of Syntactic Structures Vol. 3: Structures and Beyond*, ed. by Adrian Belletti, 104-131, Oxford, Oxford University Press.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*, Cambridge, MA, The MIT Press.
- Collins, Chris (2005) "A Smuggling Approach to the Passive in English," *Syntax* 8: 81-120.
- Dowty, David (1982) "Grammatical Relations and Montague Grammar." In *The Nature of Syntactic*

- Representation*, ed. by Pauline Jacobson and Geoffrey K. Pullum, 79-130, Dordrecht, Reidel.
- Dalrymple, Mary and Tracy Holloway King (2000) "Missing-Object Constructions: Lexical and Constructional Variation," In *On-line Proceedings of the LFG 2000 Conference*, ed. by Mariam Butt and Tracy Holloway King. Available at <http://csli-publications.stanford.edu/LFG/5/lfg00dalrymple-king.pdf>.
- Flickinger, Dan (1995) "Easy-Adjectives and Their ilk," Paper presented at the University of York, September 1995.
- Gen'ey, Hideaki (2000) "Eigo no 'Doushi-teki tough koubun' heno Koubunn Bunnpu-teki Apuroochi: "These measurements would require from one to three nights to complete," *Gengo no Sekai* 18, 53-72.
- Gen'ey, Hideaki (2002) "Eigo no 'Giji tough koubunn' heno Ninchi Bunnpu-teki Apuroochi: 'He costs to feed, to put clothes on, and he can't sleep with his feet in the bed,'" (Nihon Eibunngakkai Dai 74 Kai Taikai Houkoku, *Studies in English Literature* Vol. 79, No.2, p. 184.
- Goh, Gwang-Yoon (2000a) "Is the Tough-Subject Thematic?" Paper presented at the annual meeting of the Linguistic Society of America, Chicago, IL, January 2000.
- Goh, Gwang-Yoon (2000b) "Pragmatics of English Tough Construction." In *North East Linguistic Society (NELS)* 30, ed. by Masako Hirotani, Andries Coetzee, Nancy Hall, and Ji-yung Kim, 219-230.
- 長谷川信子(2009)「直接受動と所有受動文：little-vとしての「られ」とその素性」『語彙の意味と文法』由本陽子・岸本秀樹（編）pp. 433-454、くろしお出版。
- Hicks, Glyn (2009) "Tough-Constructions and Their Derivation," *Linguistic Inquiry* 40, 567-617.
- Huddleston, Rodney (1971) *The Sentence in Written English: A Syntactic Study Based on an Analysis of Scientific Texts*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Jones, Charles (1991) *Purpose Clauses: Syntax, Thematics, and Semantics of English Purpose Constructions*, Dordrecht, Kluwer Academic Press.
- Kim, Boomee (1995) "Predication in tough constructions." In *Derivation and Explanation in the Minimalist Program*, ed. by Samuel David Epstein and T. Daniel Seely, 133-166, Oxford, Blackwell.
- Konishi, Tomoshichi et al. (2000) *Eigo Kihondooshi Jiten (A Dictionary of English Word Grammar of Verbs)*, Tokyo, Kenkyusha.
- 梶田優(1976)『変形文法理論の軌跡』大修館、東京。
- Kajita, Masaru (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *Studies in English Linguistics* 5, 44-76.
- Lasnik, Howard and Robert Fiengo (1974) "Complement Object Deletion," *Linguistic Inquiry* 5, 535-571.
- Levine, Robert (1984a) "A Note on Right Node Raising, Tough constructions and Reanalysis Rules," *Linguistic Analysis* 13, 159-172.
- Levine, Robert (1984b) "Against Reanalysis Rules," *Linguistic Analysis* 14, 3-30.
- Mair, Christian (1990) *Infinitival Complements in English*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Nanni, Deborah (1978) "The Easy Class of Adjectives in English," Doctoral dissertation, University of Massachusetts, Amherst.
- Pesetsky, David (1987) "Binding Problems in Experiencer Verbs," *Linguistic Inquiry* 18: 126-140.
- Rosenbaum, Peter (1967) *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, Cambridge, MA, The MIT Press.
- Soams, Scott and David M. Perlmutter (1979) *Syntactic Argumentation and the Structure of English*, Berkeley: University of California Press.

Ura, Hiroyuki (2003) "Why Does It Behoove the Verb
Behoove Not to Behave in Behalf of Burzio's
Generalization? – An Analogy with Weather
Verbs –," *Jimbun Ronkyu, Humanity Review*,
The Journal of the Literary Association of
Kwansei Gakuin University 53-2, pp. 81-90.